

「テキスタイル表現における記憶のリフレームの可能性について」論文要旨

博士後期課程美術専攻工芸研究領域（染織）1321916 単 璐薇

筆者は2010年代後半から2020年初頭にかけて、自己の芸術制作におけるテーマを形成してきた。この期間、世界中でハイチ地震、シリア紛争、新型コロナウイルス感染症によるパンデミック等、時代の転換点となるような大事件が頻繁に発生した。このような時代背景の中で、中国では、スマートフォンからのインターネット使用が主流となり、遠隔的な情報の共有やコミュニケーションが簡易にできるようになった。中国社会はこれに応じて、芸術や思想全体に現れている思考や感性、そしてその基盤となる価値観の枠組みに変化が生じていた。その変化の過程とは、単なる分野のなかで新しい様式が出現に至るまでに、新たな表現が主張されるということだけでなく、むしろ社会全体の文化的・社会的な変遷が、芸術と思想の領域にも影響を及ぼすとも言える。

そして、現代社会における「美の本質」の再定義と、人々の心を動かすためのアプローチについての探究はますます重要になってきている。「工芸（クラフト）」というジャンルでは、従来の技術力、完成度、視覚的な美しさによって、鑑賞者たちに美的な体験を与えてきていた。しかし、近年、3DプリンターやVRアートなど、新たな表現方法が次々に現れ、私たちの日常に大きな異変をもたらしている。現代アートでは、社会や技術が常に進歩している中、絶対的な評判基準がないと考えられる。また、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックにより、人々の関わりが稀薄になっているため、作品鑑賞の手段も大きく変化した。例えば、美術館で作品を実際見ることができず、オンライン上で鑑賞することが試みられたり、五感を使って作品を体験することが困難になった。直接実際の空間でしか体験できない作品の価値を再考しなければならない。

この研究では今筆者の視点から出発し、独自の制作方法を用いた創作プロセスを通じてテキスタイル、空間、そして鑑賞者との関係性に焦点を当て、芸術的な表現の試みとともに、その相互作用を探求する。このような状況で、筆者は「記憶」というテーマに基づき、作品を制作してきた。「テキスタイル（技法）」「自分」「社会」を軸として、作品の価値とは何かを考えながらテキスタイルにおける新たな可能性を探求することを目指している。

筆者は主に手織り布、錆染、シルクスクリーン捺染などを駆使して表現する。糸（線）から布（平面）そして立体（空間）への作業を経て、布に対しての染色や織りを繰り返している。視覚表現への追求にとどまらず、日常の中で当たり前のような問いかけに目を向け、身近な物への愛情を制作によって喚起しながら、忘れられないもの、そして社会のなかで見慣れたものの存在を提起する。

本論文は四つの章から構成される。第一章では「作品が心を揺さぶる瞬間」を論じる。「感覚」とは外界との接触を通じて情報を受け取り、意識化する重要な機能であり、芸術作品においては観客との出会いや環境の変化によって多様な経験をもたらすと説明されている。そして、デルシー・モレロスの作品やソフィ・カルの「Blind」シリーズなど作品を取り上げ、視覚情報に頼らずに感じられる人の心を揺さぶるアートについても触れている。

第二章では「感覚から記憶へ」を論じる。具体的に錆び染という技法（テクノロジー）のきっかけになった作品《Pieces of Memories》について述べる。作品に錆びが付着した経験である。本研究では二つの「記憶」について、技法・作品を通じて研究を深める。

第三章「記憶と感覚をリフレミングするために」では、自身の表現に繋がる内的な要素を抽出する重要性を研究した。作品制作においては、技術性、反復性、空間性という三要素を重視した。三要素を活かし、さらに表現要素を深く考察するために、囲まれた空間とその外枠に焦点を当てた。そして、これらの要素を筆者の表現活動における方針を理論的に説明した。制作において重要な外的要素と作品表現における外的要因が意味や表現形式に及ぼす影響について述べる。具体的に鉄錆の染色表現を通じ

て、錆染が個人的な記憶のメタファーとなることや、その偶発性や置き換え不可能性について深く探究し、時間や環境が物事に及ぼす影響を明らかにした。鉄錆は独特な質感や色彩を持ち、感情や意味を伝えることができる。また、鉄錆が自然生成されるため、それぞれの独自性を持ち、再現することができない。鉄錆は作品において強力な表現要素となり、独特の感情や意味を伝えることができる。一方、反復のマッスルメモリーにより、布を無限に広げることができたため、布は創作の支持体として機能した。布は支持体として、素材（テクスチャー）や色彩、模様（パターン）などを通じて、思想や感情を伝えるだけでなく、関連する文化や歴史、社会的背景を反映することができる。そのため、文化的な観点から見ると、布は「textile」としての役割を果たし、創作において相関性や相互影響を示しているといえる。工芸におけるインスタレーションのあり方を論じる。これらの外的要因を考察して、作品制作に共通する方法論を模索する。

第四章「博士作品「from the soil」を手掛りとして」では、「from the soil」制作動機について論じる。「記憶のリフレーム」をテーマとして作品のイメージの深層を詳述し、第三章で述べた要素を新たな表現のために、行った実験を基に、提出作品の制作工程を図とともに解説する。

最終章では、以上の考察より、筆者の「記憶のリフレーム」による表現のあり方について論じ、都市生活を背景とするアートのあり方や、今日の多様性グローバル時代における新たなアートの可能性について探求することが可能となり、それによって既存のアートの枠組みを反省的に見直す。